

2021年7月21日 25日小補

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 33

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

ベトナム阮氏政権が組織した北海隊の活動範囲である《北海》について再考してみたい。
南シナ海関係資料で《北海》に言及しているのはベトナム側の『撫辺雑録』と海南島の漁民の『更路簿』である。『撫辺雑録』巻2は阮氏政権の組織した北海隊について次のように記している。

阮氏又置北海隊無定率、或平順府四政村人、或景陽社人、有情願者、付示行差、免其搜錢。使駕私小釣船、往北海・崑崙・岫嶗・河僊等處。跟取鱧物、及玳瑁・海巴・胞魚・海參各項亦令該黃沙隊官并管。不過採諸海物、金銀重貨罕有所得。（強調筆者）

平順府は現在のニトゥアン省（中心都市はファンラン）・ビントゥアン省である。崑崙はプロコンドール島であり、河僊はカンボジアと接するハティエンの沿岸の小島であろう。岫嶗（Cù Lao一島の意）はその中間の小島を指すものであろう。ファンランからハティエンにかけてのベトナム沿岸が一つの活動範囲であることは明かである。残る《北海》はどこか？

20世紀初頭に作成された各種の『更路簿』の記す北海がスプラトリー諸島であることは周知であるが、その外延は本によって異なっている。《海南蘇徳柳抄本》『更路簿』[陳・朱編 2016: 989-999]には次のような航路が記されている。

自烏仔峙去乙辛、用乙辛、二更収。對西北。
自乙辛回安南山、用巳亥、廿餘更、對西北。
乙辛與鑼漢灣頭乾巽相對、二十二更、對西北。

烏仔峙は Spratly Island、乙辛は Ladd Reef に比定されている [浦野 1997:27]。この『更路簿』の後半にはベトナム沿岸航路の記述も付されているが、そこでは鑼漢灣頭は鑼灣頭とも記されている。これは『東西洋港』西洋針路などに出てくる羅灣頭のことであろう。これは Cape Padaran に比定されている [陳・謝・陸 1986:1009]。ファンラン湾の南の Mũi Dinh(Mũi Cà Nà)である。ベトナム沿岸航路の記述では鑼灣頭の近辺に大佛山が見える。おそらく安南山は大佛山のことであろう。大佛山は『順風相送』に出てくる靈山大仏のことと考えられる。これは Cape Varera に比定される [陳・謝・陸 1986:1069]。フーイエン省

の Mũi Đại Lãnh である。

20 世紀初頭には近代装備を持たない小さな漁船がスプラトリー島方面からベトナム中部沿岸へ向かうルートが存在していたことが知られる。他方、補遺 8 で見たように 18 世紀後半にベトナムの小舟がスプラトリー諸島方面で活動していた例がある。このルートがもし 18 世紀後半段階に既に確立していたとすれば、平順府の漁民を中心とする北海隊の主要な活動範囲である《北海》が、20 世紀初頭の海南漁民の『更路簿』に記された北海と同じである蓋然性は低くないであろう。

スプラトリー諸島方面とベトナム沿岸の結ぶ航路について別のルートを記す『更路簿』もある。《海南王國昌抄本》『順風得利』[陳・朱編 2016:1026-1041]には次のような航路が記されている。

自烏仔峙往地盤用坤兼二線甲

自乙辛往地盤用坤兼申一線三十四更

自地盤往崑崙用丑未

地盤はマレー半島沿岸の Tioman Island である [陳・謝・陸 1986:1062]。スプラトリー島方面から一旦ぐっと南下してマレー半島方面に向かってそれから北上してプロコンドールを目指すという航路である。18 世紀後半のベトナム漁民にこのルートが知られていたか否かはいまのところ徴すべき資料がない。

一つ言い添えておくと、北海隊の拠点であるファンランは、かつてのチャンパ王国の核心域の一つであるパンドゥランガであり、今も遺跡がのこる。チャム族およびそれと近いエデ族やジャライ族はオーストロネシア語族に属する。オーストロネシア語族に属する多数の民族は太平洋一帯に分布する。海の民である。そのなかでチャム族だけは陸域に定着したが、それでも本来海の世界とのかかわりが深い人々であろう。北海隊はその遺産を受け継ぐものであると見ることもできよう。

陳佳榮・謝方・陸峻嶺. 1986. 『古代南海地名彙釋』北京：中華書局.

陳佳榮・朱鑒秋編. 2016. 『中国歴代海路針經』広州：広東科技出版社.

浦野起央. 1997. 『南海諸島国際紛争史』東京：刀水書房.